



海援隊旗(二色きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

一 意 ICHII FUNTO 奮 闘



リニューアル工事が始まる既存館と新館建設工事が進む西側(右手)

坂本龍馬記念館の前も後ろも分らないまま着任してから、早いもので1年が経過した。歳を取ると時間の流れが加速してると言われているが、疾うに還暦を過ぎた身としては、ますますそのことを実感する1年であった。鴨長明は「ゆく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず」と綴ったが、私にとっては川の流れは、急流と言えるようなスピード。季節は移ろい、記念館をとりまく環境も刻々と変化して、無常観も一入である。

リニューアル工事が始まる既存館と新館建設工事が進む西側(右手)

当誌第97号では、着任に当たつての思いを「記念館の4半世紀に及ぶ歩みに学び、己の為にとすることを見出し、：愚直に前へ進んでいくことを旨としていきたい…」と記したが、果たしてどうだろうか。「わがなすこと」を見つけただろうか。甚だ覚束ないし、怪しい。そんな中ではあったが、4回の企画展や夏休み子ども龍馬フォーラム、レッツゴー！ハンドインハンド2016などのイベントとともに、季節は流れていった。

さて今、記念館の隣接では、様々な重機が投入されて、新館の建築工事が急ピッチで進められている。来春には、現在の記念館の改修も終えて、晴れて2館体制でのグラントオープンを迎える予定である。このため記念館は、4月から約1年間の休館期間をいただくこととなる。友人の中には、「休館では、暇を持て余すのでは?」、「その間はこうするが?」などと、半ば心配し、また、羨ましそうに訊く者もいるが、とんでもない話である。

の「志 国高知 幕末維新博」の第二幕のメイン会場を務めると言う大きな使命を仰せつかつており、それに向けた様々な準備を怠りなく進めなければならない。



着々と進んでいる新館建設

新館での常設展や企画展の内容の詰めをはじめ、新旧両館での様々な展示や催しなどの組み立て、ホームページのリニューアル、グラントオープンの際の記念式典の準備など、休館中にやり遂げなければならぬ「仕事」は枚挙に暇がないばかりか、そのボリュームは今以て計り知れない。また、これからの1年は、こうした準備にだけ専念すればよいのではなく、既にお知らせしてきたように、4月から9月にかけては、熊本県立美術館、東京の目黒雅叙園、そ

して、広島のおくやま草戸千軒ミュージアムでの巡回展があるし、通年で120回にも上る、小中学校などでの「出前授業」の実施、11月の龍馬没後150年シンポジウムの開催なども控えている。これからの1年、カレン

いよいよ休館、そしてグラントオープンへ

高松 清之

龍馬記念館の25年に感謝と共感

既存館最後の企画展終了



同時に、当館の収蔵資料から「漂異紀略（大津本）」や、館の守護刀「関の孫六」など、代表的な所藏品や普段展示する機会のないものを選びすぐって展示した。

なかでも、中岡慎太郎宛龍馬書簡のニセモノは、取材に訪れたマスコミや来館者の目を引いた。筆跡からして明らかにニセモノと分かる代物だが、「龍馬の書」とされるものは、書簡より漢詩の類が多い。一方で、龍馬の和歌は本人の筆跡と確認されたものがあるが、漢詩はなく、おそらく龍馬は漢詩を作らなかったのではないかと言われている。

現状の建物では最後の企画展となる「収蔵資料でふりかえる・坂本龍馬記念館25年のあゆみ」展が、閉館とともに無事終了した。今回は、開館以来のパネル、切手シートやテレフォンカードなどの販売物、過去開催した企画展のポスターやチラシ、大河ドラマ「龍馬伝」の台本など、通常の企画展ではまず並ばない品物が数多く並んだ。少し古さを感じさせる昔の印刷物や写真などから、25年の時の流れが感じとれるコーナーとなった。

「龍馬の書」のニセモノは多く出回っており、当館には年間数件、龍馬本人のものかどうか見てほしいという相談が寄せられるが、ほとんど



壁面中央が龍馬書簡ニセモノ

がニセモノである。この資料はある収集家からまとめて寄贈いただいたうちの一点で、当館としてはニセモノを積極的に収集している訳ではないが、こうした情報が多く寄せられる当館の特徴も少しはお解りいただけたかと思う。

4月以降、記念館の展示はしばらくストップするが、教育普及活動などは継続しながら、グランドオープンに向けての準備を進めてゆく。来年の再オープン後、パワーアップする龍馬記念館と企画展にご期待いただきたい。

亀尾 美香

休館中の活動について

当館では、これまでも記念館2階近江屋にて龍馬の紙芝居を読み取り組みを続けてきたが、4月からの長期休館という機会に、高知県内の小中学校を訪問し、紙芝居の出前授業を行う予定である。

これまでに披露していた紙芝居「龍馬はともだち」の制作者で、熱心な龍馬ファンでもある兵庫龍馬会の楠本剛さんに、今回新たに3種類の紙芝居を制作していただいた。それぞれ幼・保育園・小学校低学年、



近江屋での紙芝居のようす

中学年、高学年・中学生向けと、学年に合わせて、龍馬のことを分かりやすく紹介している。当館は高知県内からの入館者数が全体の5%以下と少ないことが課題となっているが、これは高知県民の龍馬への関心の低さを表しているとも言える。この龍馬紙芝居をきっかけとして、

高知の子どもたちが龍馬に興味を持ち、家族と「龍馬ってすごい人ながやね」などと会話をしてもらえたら、本当にうれしいことである。

学校関係者の皆様には朝学活、読書の時間等にぜひご活用いただきたい。時間は1回15分程度お時間はご希望に合わせて調整可能。1時間の授業をご希望の場合は学芸員が対応。ご希望の方は記念館までお問合せください。

尾崎 由紀

2017年県外巡回展

「土佐から来たぜよ!『坂本龍馬』展」

担当者リレーエッセー④

ふくやま草戸千軒ミュージアム
広島県立歴史博物館



広島県立歴史博物館
主任学芸員
岡野 将士

中世考古学の魁・草戸千軒町遺跡と博物館

広島県立歴史博物館は、平成元年11月3日に福山城公園内の一角に開館しました。我が国中世考古学の草分けとなった「草戸千軒町遺跡」の発掘調査の研究成果を中心に、「中世の民衆生活」と「瀬戸内の交通交易」を主要テーマとして、展示を行っています。常設展示の中心は、今から700年前の草戸千軒の町並みの一角を再現した実大復原で、来館者から「当時の生活の息吹が感じられる。」と大変好評をいただいております。

坂本龍馬と福山

近年、『流星ワゴン』、『崖の上のポニョ』、『探偵ミタライの事件簿』等のドラマや映画で話題



館内の草戸千軒Ⅰ展示室

となった福山市鞆町は、古代から「潮待ちの港」として栄え、多くの船と人が立ち寄ったことで知られています。坂本龍馬もその一人です。

慶応三年（1867）4月23日午後11時頃、坂本龍馬が乗っていた「いろは丸」は紀州藩の「明光丸」と備中六島沖で衝突、

鞆に曳航される途中に沈没しました。この海難事件「いろは丸事件」の補償問題を解決するため、坂本龍馬は鞆に四日間滞在し、紀州藩との談判を行いました。この交渉は決裂しましたが、後に「万国公法」

に基づき賠償金を得ています。鞆には、このとき龍馬が滞在した「枡屋」、交渉の場が設けられた「魚屋」、また紀州藩が宿所とした円福寺などゆかりの地が現在も残されています。

また、海底に沈んだ「いろは丸」と思われる船の潜水調査が行われ、引き上げられた品々が鞆のいろは

丸展示館で展示されています。

巡回展開催のきっかけ

当館の館長と高知県立坂本龍馬記念館の森・前館長の出会いが、この展示会の開催のきっかけとなりました。館長と森・前館長はお互い意気を感じる部分があったと聞いています。

その後、森・前館長がお亡くなりになられたため、私はお会いできませんでしたが、この度の巡回展の調査・準備・展示をとおして、坂本龍馬記念館の皆様を始め、林原美術館、熊本県

立美術館、目黒雅叙園の皆様と出会うことができました。

「土佐から来たぜよ!坂本龍馬展」は、来る平成29年7月14日（金）から9

月10日（日）まで当館で開催しますが、当館開催中は講演会や解説会、お茶会等も企画しています。夏休み期間中でもあり、多くの方々に楽しんでいただけたらと思っております。

当館の開催が、長く旅をしてきた巡回展の最後となります。最終ランナーとして最後までしっかりと走り抜きたいと思っております。

当館の開催が、長く旅をしてきた巡回展の最後となります。最終ランナーとして最後までしっかりと走り抜きたいと思っております。

当館の開催が、長く旅をしてきた巡回展の最後となります。最終ランナーとして最後までしっかりと走り抜きたいと思っております。



鞆の浦の風景

2017年県外巡回展「土佐からきたぜよ!『坂本龍馬』展」会場スケジュール

岡山 林原美術館
会期終了

熊本 熊本県立美術館
4月8日（土）～5月14日（日）

東京 目黒雅叙園
6月1日（木）～6月25日（日）

広島 ふくやま草戸千軒ミュージアム
広島県立歴史博物館
7月14日（金）～9月10日（日）

浦戸城天守台



士佐史談会会長
現代龍馬学会理事
宅間 一之

駐車場の北にこんもりと茂る森がある。

森への登り口を「浦戸城天守跡」の文字が教える。「浦戸城」を知らせる碑は、駐車の車に隠されて人目に触れることは少ない。土佐中世の城跡でこれほどまでに痛め続けられている城跡も少ない。

再びここ浦戸に城を移転する。

元親がこの地に構えた天守の面影は偲べない。だが天守台はいまも坂本龍馬記念館や「桂浜荘」の駐車場となる「詰ノ段」の北東部に残る。「詰ノ段」より7m高く、標高59.7mである。古図には「五間四方」と描かれているが、地形も昭和33年に展望台建設の為に北斜面の一部が削られ不確定だが、上部は東西11m、南北15mの不正方形形で、いまは城八幡宮と航海の安全を祈って大山祇神社が鎮座する。斜面で目につく石は天守台を築いた石垣の面影であろうか。のちに入城した山内一豊は、この天守を大高坂に移し、高知城三の丸の丑寅櫓にしたとも言う。外観は二層(三層ともいう)、内部三階の櫓というが享保の火災で焼失した。

建武3(1336)年、「於浦戸」津野・三宮らの北朝方と、南朝方水軍との交戦記事が、地名の見える最古の史料であろう。戦国の世、本山氏が高知平野に進出し、天文9(1544)年には土佐中央部を支配下にし、浦戸湾口に浦戸城を築き重臣本山玄蕃がこれを守った(『元親記』)。しかし長宗我部の勢力は長岡、香美南部から西に本山氏を圧して行く。永禄3(1560)年、長浜戸ノ本の戦いで敗れた本山茂辰は浦戸城に逃れた。長宗我部国親はこれを包囲するが、にわかに囲みを解いて岡豊に帰る。その後元親の支配下に入り、介良の横山九郎兵衛が城番大將となり9人の給人が城番として城屋敷に居住したという。長宗我部氏は土佐二国の領主から四国制覇を目指したが、天正13(1585)年秀吉の軍門に降り、秀吉指示の領国経営に努力する。元親は本拠とした岡豊城から大高坂(現高知城)に城を移したが、天正19(1591)年頃、

戦後、城の周辺や城跡の遺構は開発の犠牲となつて歴史の風景を変えた。中心地「詰」には坂本龍馬記念館や「桂浜荘」がそびえ、さらに、龍馬記念館新館工事は郭も深く掘り込み地中までも変えた。城跡には長宗我部元親・盛親の居城となつた10年の歴史も、また朝鮮出兵や小田原遠征、サンフェリペ号の漂着から浦戸一揆と相次いだ事件の数々を語り伝えるものはほとんどない。天守台に茂る木々の梢を揺すつて過ぎる潮風と、城下からの潮騒がかるうじて歴史の風景を思い出させてくれるのみである。



浦戸城天守台

み地中までも変えた。城跡には長宗我部元親・盛親の居城となつた10年の歴史も、また朝鮮出兵や小田原遠征、サンフェリペ号の漂着から浦戸一揆と相次いだ事件の数々を語り伝えるものはほとんどない。天守台に茂る木々の梢を揺すつて過ぎる潮風と、城下からの潮騒がかるうじて歴史の風景を思い出させてくれるのみである。

『桂浜・浦戸 碑めぐり』④ 時代を越えて紡がれる思い

「高浜虚子句碑」

坂本龍馬記念館から坂道を下り、バス道に出る手前右手に、高浜虚子(たかはま きよし)の句碑がある。「海底に珊瑚花咲く 鯨(はぜ)を釣る 虚子」。

「昭和24(1949)年10月、高知市で開催された俳誌『龍巻』の200号記念大会に海路来遊した折りの一句。昭和31(1956)年6月建之。設計・島村治文、石工・竹本茂春」の説明がある。島村治文は桂浜にある龍馬像建設時に原作者・本山白雲の助手を務めた人だ。

俳誌『龍巻』の名前は、虚子が初めて室戸岬へ赴いたとき、竜巻が起こり虹が出て、室戸岬が自分を歓迎してくれたのだと喜んで詠んだ句に因んだものだという。除幕式には、約150名もの関係者が出席。式には、虚子の長男尾さんも東京から駆けつけ、「虚子の句碑としては全国でも稀なできばえで感心した。父もさぞよろこぶだろう」(高知新聞昭和31年6月12日)と感謝の言葉を述べている。

虚子は明治7(1874)年、愛媛県松山市生まれ。中学時代、学友で俳人の河東碧梧桐(かわひがし・へきこう)と交流を深め、明治24年には正岡子規と出会う。後に虚子と碧梧桐は子規門下の双壁と称される。また虚子は明治31年には、子規の友人から俳誌『ホトトギス』を発行人を引き継ぎ、客観写生、花鳥諷詠を提唱して俳句の新たな世界を広げた。

自伝の中で虚子は、「俳句の如きは叙事詩というものも当らないし、又抒情詩というものも当らないように思ひまして、(中略)叙景詩というのが最もその性質をあきらかにしているものである」と述べている。自然界や人間界のありのままの風景をありのままに表現するというのが虚子のそんな思いがこの句碑にも紡がれているように感じた。

渡辺 曜子・西本 有里



視聴方法は簡単!

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう!

- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
- ② アプリを起動し、マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2017年6月30日まで閲覧可能です。



今年の1月13日に、新発見の龍馬の手紙が高知県によって発表された。福井藩の重臣・中根雪江に宛てた慶応3年（1867）11月10日の手紙だ。（全文は高知県HP参照）

龍馬を調べていると、時々スケールが大きすぎて、私のような普通の人間には、理解が難しいことがある。新発見の龍馬の手紙が正にそうである。

高知県が手紙を発表した際、「新国家の御家計」の部分に注目が集まり、各メディアも大きく扱った。しかし、私が注目したのは、追伸でさらっと触れている部分である。ここに追伸を書き出してみる。

追白 今日永井玄蕃
頭方ニ罷出候得とも御
面会相不叶候。談した
き天下の議論数々在之
候ニテ明日又罷出候所
存ニ御座候得ハ大兄御
同行相叶候ハ、実ニ大
幸の事ニ奉存候。

以上が追伸で「今日、永井

玄蕃頭の所へ行きましたが、ご面会はできませんでした。相談したい天下の議論が数々あるので、明日また伺うつもりですが、中根さんもご同行していただければ実に幸せな事です」という意味だ。

この部分を理解するには、永井玄蕃頭が何者かを知らなければならぬ。永井玄蕃頭とは、幕府の若年寄格の永井尚志のことである。この役職の「格」というのが重要で、永井は本来、若年寄になれる家柄ではない。若年寄という役職は、譜代大名が任命される幕府の重職で、永井の家は旗本なので石高は1000石しかない（大名は1万石以上）。

しかし、徳川慶喜が大抜擢して、江戸幕府始まって以来初めて、旗本から若年寄に就任させた。したがって、若年寄「格」となる。慶喜は後年、「幕府には人材がないのではなく、採る途がなかったのだ」、「永井を若年寄に用いるのが精一杯だった」と回顧している。このように、永井という人物は、慶喜が最も信頼した家臣の一人であり、当時の慶喜の考えを最も理解している

人物だったといえる。

この永井と「談じたき天下の議論数々これあり」という龍馬は、一体何者なのか。驚くしかない。この後、永井と会った龍馬は、11月11日の林謙三宛ての手紙で、永井とは「ヒタ同心」（びったり同じ考え）だったと書いている。そして永井は、龍馬が暗殺された日に、中根雪江に対して、次のような龍馬評を伝えている。

則ち昨夜（14日）も参り申し候。象二郎とは又一層広大にて、説も面白く之れ有り、彼が申す処至極尤もに候え共

後藤象二郎は土佐藩の参政で、能力も人柄も申し分ない。その後藤と比べて「一層広大」だと永井に言わせる龍馬という人は、スケールが大きすぎて、理解が難しい。

龍馬が言う「天下の議論」とは、当時の最重要課題である王政復古についてである。武力によるのか、平和的な方法か。後藤象二郎や龍馬、薩摩藩の小松帯刀、福井藩の中根雪江らは平和的な方法を考え

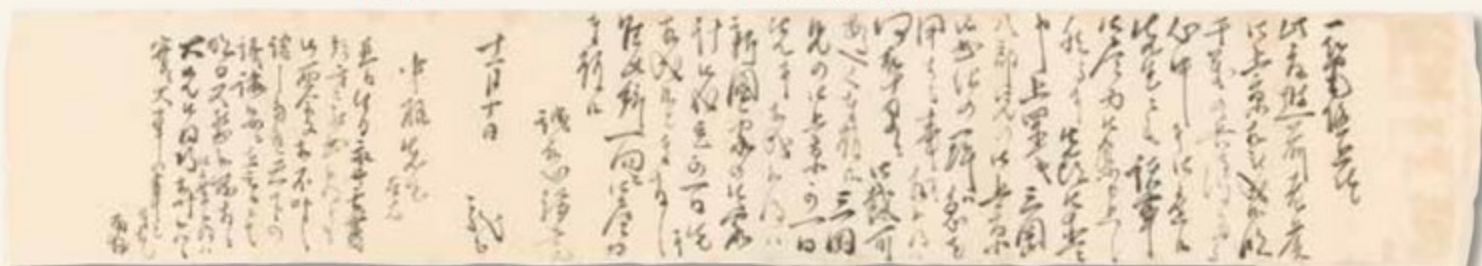
ていた。平和的に収めるには、慶喜にも何らかの地位を確保するのが手っ取り早い。これが永井と「ヒタ同心」の部分だろう。しかし、薩摩藩の西郷隆盛や大久保利通、公家の岩倉具視らは、武力行使も辞さず、慶喜を新政府から排除する考えだった。

新発見の手紙の5日後、龍馬は暗殺された。その後、王政復古はクーデター方式で行われ、兵が御所を取り囲み、慶喜不在の中、王政復古の宣言がなされた。そして、小御所会議で慶喜に対して「辞官・納地」（内大臣の辞職と領地の返納）が決定した。当然、永井や会津藩・桑名藩らは、この決定に激怒した。こうして、1ヶ月も経たないうちに鳥羽伏見の戦いが起こっていく。

龍馬はこのような「天下の議論」に大きく関わり、幕府方の鍵を握る永井に一目置かれていたのだから、凄い人物である。

▼追伸

▼「新国家の御家計」



慶応3年11月10日中根雪江宛て坂本龍馬書簡（画像：高知県提供）

拜啓 龍馬殿

72通

できるように努めていきます。また機会がありましたら再度来ます。
 (2月9日 宮城 M・I 23歳 男性)

平成28年12月21日〜平成29年1月20日

「毎年の家族行事」

龍馬さん、今年も来ましたよーいや、帰ってきましたよ、あなたの愛した桂浜に。毎年年末の家族4人の家族旅行。私や子どもたちがあなたを感じるこのできる大切な行事です。そして今年は何と80歳を超える私の両親もあなたに会いたいと一緒に帰って来ました。今年も一年間の疲れと汚れを洗い流し、そして明日からの活力をもらって帰ります。来年もあなたを目指して、でっかく、志をもって頑張ります！
 (12月25日 奈良 N・I 53歳 男性)

「龍馬の目指した日本に」

私は今回初めて高知県に来させていただきました。歴史の授業などでよく耳にする「坂本龍馬」。あなたの事は基本の事程度しか分かりませんでした。この龍馬記念館に来て、あなたの事を沢山知れました。あなたが目指した日本。それは現代の日本なのでしょうか。また世界には戦争や紛争テロによって命を落とす人は少なくありません。この世界を委ねられるのは私たちが若い力。あなたの目指した世界を私に叶えてみせます。良い世の中になりますように。
 (12月30日 兵庫 M・M 14歳 女性)

「土佐の誇り」

貴方の勇氣、行動力、知恵、未来への希望がなければ今の日本は無かったと思います。本当にありがとうございます。土佐人として貴方を誇

「大好きです」

私は歴史は好きでしたが、幕末にあまり興味をもてずにいました。知り合いからの強いすすめで「龍馬伝」を観ました。それ以来、龍馬さんが大好きでたくさん勉強しています。誰にも流されない生き方や考え、誰もしないような発想力、そして思っていることを行動に移す行動力、すべて素晴らしいと思います。あなたのおかげで今の日本があります。ありがとうございます。
 (1月15日 56歳男性 52歳女性)

「龍馬のトリコ」

大変ご無沙汰しております。私に成り、この先たのしい思い出をつくりたく10年以上ぶりに高知に参りました。私が貴方を知ったのは今から30年以上前、勤めていた会社の若い社員より、Iさんは本が好きだからと司馬遼太郎さんの「龍馬がゆく」を紹介され読んで一発でもう貴方のトリコになってしまいました。これで土佐の高知と回、京都の龍馬を追って2回他に京都は多数、長崎は去年の11月に行ってきた。これからの私を見て居てください！
 (2月7日 神奈川 Y・I 61歳 男性)

「日本一周」

現在、日本一周中でありませ。龍馬のようなすばらしい仕事を今後

「龍馬、桂浜、鯉のたたき」

3回目の来館です。今の日本の礎を作ってくださってありがとうございます。タフにユーモアたっぷり生き抜き、広い視野で世の中全体を考えて、進むべき道を考えてくださった龍馬さんを尊敬します。そして私が今まであったどこよりも美しい桂浜の海岸線！龍馬さんと桂浜と鯉のたたきがある土佐が大好きです。これからも何度も来たいと思います！
 (2月9日 千葉 A・Y 42歳 女性)

「龍馬と同じ気持ち」

今日初めて記念館に入りました。今まではバスの都合にて通りすがるのが関の山でしたが、今回はゆっくりと見て回ることが出来ました。龍馬殿のことが解った様に思います。この海原を見ていると心の広さややすらぎを感じるのには龍馬と同じ気持ちになる気がして、すごく満足の心です。土佐の町が龍馬によって築

「持ちに」

五條代官所の役人が見回りに来て吉村虎太郎の墓碑を下の川に投げ捨てる。村人はそれを探

東吉野村エッセイ⑨ 流行神になった吉村虎太郎



奈良県東吉野村 阪本 基義

今年は大政奉還150年、2年間にわたる「志国高知 幕末維新博」時代は土佐の山間より「開幕した。幕末維新の一角を支えた土佐、自由民権運動発祥の地・土佐の風土と文化に触れる絶好の機会である。」
 さて、文久3年(1863)9月、幕府追討軍のために15人の天誅組志士が戦死した東吉野村には3カ所の墓がある。その一つに9人の志士が祀られている「明治谷墓地」がある。ここには吉村虎太郎、那須信吾、鍋島米之助の3人の土佐出身者も眠っている。この墓に「贈正四位 吉村寅太郎墓」(大正元年頃、写真1)「吉村庸太良墓」(写真2右)「天仲吉村市之神」(不詳、写真2左)の3基の墓碑がある。



1. 明治谷墓地全景

し出して元の位置に祀る。また投げ捨てる。また捨てて来て祀る。これを繰り返す。ついには役人もあきらめてしまったという。これが石碑の角が丸くなった理由である。

よく見ると、吉村庸太良墓碑の角が丸くなっている。村内に残る古文書「天誅組三係取調書並二各石碑建設セシ事由」には、「各石碑ハ文久四年冬、村民中、左ノ各人其周旋ノ勞ヲ執リ建設ス。其費用ハ衆人募参シテ供スルトコロノ賽銭ヲ以テ充ツ。……右七人ハ石碑建設の周旋ヲナシタルタメ、元治元年秋十月頃、幕吏来テ石碑建設セシヲトガメ、取調ニ来テ七人方周旋セシ事露頭シ遂ニ捕縛セラレ五條代官所ニ拘引三十五日余リ獄屋ニ繋ガル」とある。

「大明神様」とは特別に崇敬される神のことだそう、吉村虎太郎の人氣ぶりが想像される。志を遂げることなく散華した敗者天誅組志士たちへの憐れみ、哀しみか。権力に対する庶民の抵抗だろうか。

余談だが、碑の裾に「吉村内」の刻印がある「天仲吉村市之神」の墓碑は、虎太郎の京都での交際相手と建立したと伝わる。恋人虎太郎への思慕が痛々しく感じられる。この女性は虎太郎京都潜居地の隣「丹虎」の娘だという。霊山護国神社の虎太郎墓には「おくに」司馬遼太郎の短編「幕末には「おゆう」、吉見良三の「天誅組紀行」には「おくみ」と紹介されている。

「おくみ」と紹介されている。



2. 吉村虎太郎墓碑

かれてきたとの意味が理解できずうでた。よかった。

(2月15日 滋賀 T・T 67歳 男性)

「龍馬マラソン」

56歳、11度目のフルマラソン前日に桂浜と記念館を訪れました。今回のマラソンは肺炎で入院後のリハビリをかけるマラソンですが、練習不足でこの海までたどり着ければ十分とも考えます。龍馬様よりは存分に永く生きましたが、人生もここで転機を迎えます。仕事、子育て、遊び。まだまだ新たなチャレンジを試みます。息子は友厚、11才、龍馬様の親友の薩摩の武士で大阪の恩人の名をいただきました。幕末の真の志を伝えたく思います。混乱の世の一筋の光を見つめるべく、今後共宜しく見守りくださいますよ。

(2月18日 大阪 H・Y 56歳 男性)

「龍馬に誇れる日本に」

久しぶりにまた桂浜へ来ました。今回は娘も連れて来ました。いつ来てもこの海はきれいですね。そしていつ読んでもあなたの手紙は私に勇気をくれます。日本のために前向きに生きたあなたをいつも尊敬しています。日本はまたいろんな問題を抱えています。龍馬さんが作り出してくれた日本の未来を私達一人一人が大切にできるよ。龍馬さんに誇れる日本にできるよ。見守っていてください。また来ます。元気ありがと。

(2月20日 大阪 S・H 35歳 女性)

「きっかけは龍馬」

3年ぶりに家族と共に高知に来ました。いつ来ても桂浜は晴大で、いろいろなストレスから解放されます。20年前、龍馬さんの話題がきっかけで家内と知り合い、結婚、長男・次男が生まれ、度々記念館を家族で訪れ

ましたが、メッセージを書くのは今日が初めてです。とくに今日は長男が高知大学を受験するため、共に高知に来ました。色々思ってた高知大学を選択したようですが、縁があれば良いなと我が事のように思います。親バカですが龍馬さんのように大きな心で、また着実に物事を一つずつ築きあげてゆく人間になってくれればと思う次第です。取り留めの無いメッセージになりましたが、また龍馬さんに会いに来たいと思います。

(2月25日 兵庫 T・H 57歳 男性)

「快晴です」

久しぶりの高知です。今回は長男の大学受験につき添って来ました。初めて記念館を訪れてから7年半が経ち、11歳と9歳だった息子は18歳と16歳になりました。まさか高知大を受けるとは思ってもよかったです。龍馬様のご縁を感じます。今日は曇一つ無い快晴です。今までの鬱々とした気持ちを一掃するよ。素晴らしい晴天です。今まで停滞していたやる気が起りそう。な予感がします。高知に来て良かったです。龍馬様いつもお見守り有り難うございます。

(2月25日 兵庫 N・H 52歳 女性)

「情熱と行動力」

今日は7歳の息子を初めて連れてまいりました。小学3年の時に、私は龍馬さんに出会い、以来ずっと私の原動力に欠かせない「先生です。愛嬌から向かう道中、龍馬さんの話をずっと息子に話しながら来ました。息子も「カッコいい」「やさしい」と大好きになったようです。龍馬さんがいてくれたから今の日本はあります。龍馬さんが無念の思いで旅立たれたこと、残してくれているあらゆるものを目にすると涙が出ますが、その分、命を大切に、生まれてきた以上、情熱と行

動力をもって人のためになることをしていきたいと思います。龍馬さんが残してくれた言葉である決意ができ、いよいよ今月行動を起こします。本当に心から感謝しています。

(3月4日 愛媛 E・T 36歳 女性)

「龍馬の声」

何年ぶりに来ました。心に何か迷いがあると龍馬の声を聞きに来ます。今の世界へ龍馬の声を聞かせて欲しい。日本をいま一度せんたくすると。エネルギーをもらって帰ります。また心がさみしくなったら来ます。

(3月5日 愛媛 A・S 55歳 男性)

編集者より

いよいよ約一年の休館期間に入ります。休館中も『飛騰』の発行は継続しますので、この「拝啓龍馬殿」にも引き続きメッセージをお寄せいただきたいと思ひます。記念館の仮事務所（国民宿舎桂浜荘地下1階）に拝啓龍馬殿のコーナーを設置予定ですので、桂浜にお越しの際にはぜひ龍馬への想いをお寄せください。また、休館中に熊本・東京・広島で開催する巡回展にも拝啓龍馬殿コーナーを設置していただく予定です。皆さまからのメッセージをお待ちしております。

尾崎 由紀

「龍馬のお話と一絃琴を聴く会」龍馬の気持ちになって楽しい音色に触れるひととき

今年2月、清虚洞一絃琴宗家四代 峯岸一水さんをお招きして、龍馬や家族ゆかりの一絃琴演奏会を開催した。一絃琴はその名の通り、一本の絃の琴。一枚の桐の板にたった一本の絃の糸が張られている。幕末期、土佐の勤皇の志士たちが一絃琴の稽古にことよせて討幕の密議を交わしていたという話もある。また、龍馬の兄や姉も一絃琴を習っていた。

今回は、「竜馬がゆく」(司馬遼太郎著)の中の、龍馬の妻お龍が道具屋で一絃琴を見つけてきて龍馬が演奏してみせる、という場面の朗読と、物語の中で龍馬が演奏した曲を実際に一絃琴で演奏するという趣向で、会場は一気に幕末にタイムスリップしたかのような空気に包まれた。

峯岸さんによる一絃琴の音色は、とても一本の絃から奏でられているとは思えないくらい表情豊かな音色で、目を閉じて聞いているといろんな風景が浮かんでくる。水の音や風の音、小鳥のさえずりのような音。セリフのようにも聞こえる音や、ヒッチコックの映画の一場面を思い起こすような音もあった。曲のタイトルから、この音はこんな情景を表現しているのかな？と想像を巡らせるのがとても楽しくて、きっと龍馬も兄や姉が演奏する一絃琴を楽しみながら聞いていたのだろうと想像できた。

一体どうやってこんなに多様な音を奏でているのか、その手元を見てみたくなり少し席を移動した。魔法のように音を奏でる一絃琴の魅力に引き込まれてしまった。

一絃琴は、音と音の間も楽しむ。ものだという。峯岸さんは最後に「小さな音に耳をかたむけて。耳と心をおせんたく。してください」と締めくくった。

尾崎 由紀



一絃琴

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！

視聴方法は簡単！

- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
② アプリを起動し マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2017年6月30日まで閲覧可能です。



■「海に見える・ぎやらしい11年間の軌跡から展望へ」

1月11日から始まった「海に見える・ぎやらしい11年間の軌跡」展では“ぎやらしいの変遷年表”、“第1回～第114回の展覧会写真パネル”、“過去の展覧会ピックアップ展示”、“幕末の志士人気ベスト10”集大成コーナー、装道礼法きもの学院の“創作帯結び”、そして総勢43名の方々の作品とメッセージなどを展示した。展覧会は、メッセージと作品の依頼から始まり、80日間の会期中に展示替えを行い、第115回の開催を3月31日で終了した。



展覧会風景

もっともっと11年間で表現したかったが到底網羅しきれず、もどかしさは残った。果たして観覧者の方々はどのように感じてくださったのか？しかし、ほぼ月1回のペースで展覧会を開催し続けてきた現状は目まぐるしく、“ぎやらしい年表”の最後に第115回が加わり、正直ホッとした。

また、この展覧会を開催するにあたり、再び作家の方々と交流することが出来、改めて11年間の重みを実感した。この時間の積み重ねの中に生れる貴重な関係が、ぎやらしいを続けていける醍醐味だと思っている。と共にこの醍醐味が、

作品や展覧会を通してどの位観覧者の皆様に届けられ、楽しんでいただけるかが今後の課題でもある。

リニューアル後の新しい空間では、まずは従来通り、県内・県外作家による龍馬の世界をイメージした作品の展覧会を開催する。そして今まで以上に新人作家の風も吹きこんでいきたい。次に、子ども達や学生達とのコラボレーションで試みる作品の展覧会を目指す。また、一般公募的な作品展示も出来たらいいと思う。これらはワークショップからの展示展開へもつながると思う。そして、作品と共にイベントやパフォーマンスなども開催し、新館ホールとの連携プランとしても多様に展開していきたいと考えている。

龍馬と海と作品が一体となり、アートとして表現出来る「海に見える・ぎやらしい」の類を見ない特色を、作家の方達や皆さんと共にいかに伸ばしていけるのかが、大きな期待となり広がってゆく。

「海に見える・ぎやらしい」へ行けば、龍馬もアートも楽しめる“龍馬とThe Arts〈芸術〉”な空間、それが新たな「海に見える・ぎやらしい」の姿である。

リニューアル後の“ぎやらしい”にご期待ください。

中村 昌代



展覧会風景



装道礼法きもの学院「創作帯結び」

高知県立坂本龍馬記念館の休館について

記念館は、新館増築等工事のため、本年4月1日から約1年間休館します。グランドオープンには平成30年春を予定しています。「志国高知 幕末維新博」第二幕のメイン会場として新たな装いで登場しますのでご期待ください。

休館期間中の仮事務所は、4月20日から隣接の国民宿舎桂浜荘に開設します。電話及びFAX番号に変更はありません。ご不便をおかけしますが、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

*仮事務所住所 〒781-0262 高知市浦戸城山830-25 国民宿舎桂浜荘内

入館状況

2017年3月20日現在(開館以来9,214日)

- ◆総入館者数 3,932,019人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2016年度最多入館(2016年5月4日) 2,098人
- ◆2016年度最少入館(2016年12月21日) 36人

編集後記

いよいよ休館です。開館以来26年目の春、私たちは新しい時を迎えました。新館建設も進み、一部では建物の形が見えてきました。また、今までアイデアを出しながら小さな改装を重ね、変化と話題を提供してきた既存館も、全面改装のときを迎えます。

休館とはいえ、引越から資料の整理、県外巡回展、教育普及、グランドオープンに向けた取り組みなど、職員にとっては通常以上の忙しさが待っています。そんなときだからこそ、「一意奮闘」。皆の心をひとつにし、一人ひとりが努力することの大切さを思います。変化を迎える私たちは、今まで以上に冷静と情熱を忘れてはならない。「飛騰」での情報発信も止まることはありません。ご愛読ください。(ゆ)

館だより“飛騰”第101号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏
 〒781-0262 高知市浦戸城山830
 発行日 2017(平成29)年4月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
 発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp
 高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
 入館料 一般500円・高校生以下無料
 身体障害者手帳・療育手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は、120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください

私のテーマ

いろは丸事件の記録(1)



渋谷 雅之

豊川 渉日記

豊川 渉という伊予大洲藩士がいる。この人物は幼少の時期から昭和5年に没する直前までの日記を書いた。今回から3回に分けて書く「私のテーマ」は、今は失われて無い豊川 渉日記のもたらした、いろは丸沈没事件に関する記録をめぐる物語である。詳細は筆者の近著「いろは丸始末」にまとめたので、ご覧くだされば幸いである。

豊川 渉は大洲藩が幕末に購入したいろは丸に20歳前後の時期、下級船員として乗り組んだ。まだ重要事項を知らされる立場にはなかったが、沈没事件の前後に土佐藩から回覧された文書や自らの体験を元に、事件の貴重な記録を残した。事件の一方の当事者である紀伊藩の記録は「南紀徳川史」に纏まったものを見ることが出来るが、土佐藩側の記録は豊川 渉の残したものが全てである。

豊川 渉は自ら記録した日記を元にして、出生から昭和3年までの80年にわたる記録「思出之記」を書き下ろした。そしてこの記録が現代に残される。

豊川 渉の孫(渉の長女・アキエの子)にあたる望月宏氏により、平成23年に刊行された「豊川 渉の思出之記」という書物(創風社出版)は、渉の三男・豊川三郎により保管され、活字化された明治39年頃までの記録と、それ以後の手書き文書のデジタル記録である。

資料の解説その他は望月宏氏の娘(豊川 渉の曾孫)・篠原友恵氏により行われた。この記録の「十一歳から三十歳まで」の項にいろは丸沈没事件の詳細が含まれる。

坂本龍馬関係文書

「豊川 渉の思出之記」が発刊された平成23年から86年遡る大正15年「坂本龍馬関係文書第二」という書物が刊行され、この中にいろは丸沈没事件に関する土佐藩側の記録が収載され、いろは丸研究の原典となる。その記事を掲載順にまとめると次のようである。

- ① 明光艦海路線図
- ② 土佐守内海援隊長 才谷梅太郎 紀伊蒸気船明光丸応接書
- ③ 書状(大正七年四、五月・豊川 渉より村上是哉宛、榎尾調蔵より村上是哉宛、豊川 渉より榎尾調蔵宛の三通)
- ④ いろは丸終始顛末

これらの記事は伊予史談会から提供を受けた資料を丸ごと引用したものであることが想像される。④「いろは丸終始顛末」は、豊川 渉がいろは丸沈没事件の顛末を日記をもとにまとめて書き下ろしたものであり、冒頭に述べた「豊川 渉の思出之記」に含まれる記事と類似するが同じではない。これらの記録公表までのいき

さつについては書状③から推察することが出来る。書状に登場する村上是哉と榎尾調蔵は大洲史談会のメンバーである。

資料が世に現れる発端は榎尾調蔵という人物が豊川 渉を訪ね、いろは丸一件に関する資料の提出を依頼したことから始まる。豊川 渉から提供された資料は大正7年11月に法華寺(現大洲市西大洲)で行われた大洲史談会において公表された。豊川 渉の書状には、この資料の性格が次のように報告されている。

才谷梅太郎紀伊蒸気船明光丸 応接書ナルモノハ当時長崎出張ノ土州藩士ヨリいろは丸船將ニ対シ明光丸トいろは丸衝突セシ際ヨリ紀土両藩士間ニ於テ応接ノ顛末ヲ報告ノ為ニ幾回ニモ該 応接書ヲ回付シ来リタルモノヲ 謄写セシメラレ其都度我輩共ニ 毛回覽ニ付サレタルヨリ一覽毎 二不肖方謄写シ置タルモノヲ纏メテ一冊トナシタルモノナリ

その後この資料は伊予史談会(松山に本拠を置く愛媛県の史談会)の手に渡り、昭和3年に「いろは丸航海日記」という和綴じ本が作成され、資料の保存が図られることになる(次回)。

資料を最初に世に出した「坂本龍馬関係文書第二」は岩崎英重(鏡川)により編集されて日本史籍協会から大正15年に刊行されたものだが、収載記事にはその出典が書かれていない。そ

のため、いろは丸関係の研究に関する豊川 渉や大洲史談会の名譽と功績が抹殺された。

岩崎英重は日本史籍協会の創立に尽力した人物で、日本の史学界で高く評価されているが、この時代の歴史書は、その場限りの非学術的なものが多く、成果を以後の批判に供し、後世に引き継ぐという基本的な人文科学研究の思想がなかった。

ところで「坂本龍馬関係文書第二」の冒頭に掲載された①明光艦海路線図(左図)は、以後の歴史書に広く掲載された著名なものだが、この図に関する解説は当時のどの記録にも出てこないものであり、岩崎英重の創作と考えるほかはない。



のない記念館に

として～

新館設計者(一級建築士) 能勢 修治 さん

記念館は4月から約一年間の休館に入る。開館10年目ごろからの懸案であった既存館の全面リニューアルが始まるためである。昨年10月には、記念館西側の敷地(元駐車場)で新館建設も始まり、工事は順調に進んでいる。

広く太平洋を望む高知県立坂本龍馬記念館が、今まさに本格的な博物館として生まれ変わろうとしている。記念館着工以来約30年を経て、来春には新館と既存館を合わせてグランドオープンの時を迎えるのである。記念館はこの春、大きな一歩を踏み出した。

そこで、新館設計者である(株)石本設計事務所の能勢修治さんに話を聞いた。

新館設計者はどんな人？

毎月、関係者打ち合わせ会のため東京から高知へお越しいただき、ありがとうございます。会が始まるまでの時間、お忙しい中を恐縮ですが、よろしくお願ひします。

新館建設工事が始まり、日毎に現場風景が変わって行きます。どんな新館ができるのだろうと皆がワクワクしているところです。そして、その新館をどんな方が設計したのかというのは、皆さんが知りたいところだと思えます。私も能勢さんがどういった方なのか、興味あるところです。

ちょっと照れますね(笑)。

私が生まれたとき父は長崎の三菱重工に勤めていたので、私は2歳まで長崎市で育ちました。母方の祖父

は熊本の人ですが、祖母は天草出身です。長崎の城山という所で育ち、子どもの頃から歴史には興味がありましたね。

大阪府北部に能勢町という町があります。私の父方の一族はその辺りの出身だと思えます。曾祖父は能勢安次郎といつて、京都で織維関係の問屋を営んでいて、同志社の新島襄から洗礼を受けています。曾祖母は鳥取の人で、同志社女学校で学び、受洗しました。そういうご縁で、墓は同志社の創始者一族と同じ場所にあります。祖父もクリスチャンで、東大卒業後、北海道に渡りました。三井の北海道炭礦汽船、いわゆる北炭に勤めまされたので、父は北海道夕張生まれです。早稲田大の理工学部で経営工学を学びました。

面白いファミリーヒストリーですね。坂本龍馬の子孫たちと時代や動きが重なってきます。もっとお話を深めたいところですが、話は現在の能勢さんにつながってきました。つまり、能勢さんが建築の道に進んだのは、お父さんの影響もあったということですか。

そうですね。父と同じ早稲田に進んだということがあります。祖父の影響もあるでしょうね。祖父は中国宋時代の陶器をはじめ美術全般が好きでした。子どもの頃、よく画廊に連れて行ってもらいましたね。



私は父の転勤に伴い、広島学院というカトリック系の男子校で学びました。理科系が得意で、美術も好きだったので早稲田大へ行き、建築の道に進もうと思いました。卒業すると石本建築事務所に入り、多くの設計を手がけてきました。

外装には日本初のタイルを

新館建設の設計公募では、石本建築事務所を中心に、既存館設計者である高橋晶子さんのワークショップ、若竹まちづくり研究所の三社で共同企業体をつくり参加していただきました。能勢さんは、当館と同じように海に近い沖縄の博物館を設計した実績をお持ちです。新館には、会社を代表する建築家(プリンシパルアーキテクト)である能勢さんの実績も反映

されていると思いますが。

建物というのは土地や風土に合ったものであることも重要ですね。

沖縄という海に囲まれた風土で、県立現代美術館・博物館を設計した時は、そのことを特に考えました。潮風や台風という気候風土とともに、城(ぐすく)や御嶽(うたき)という聖域があり、自然崇拜を重んじる土地であること。伝統工芸の琉球ガラス、琉球石灰岩、サンゴなどを建築素材として用いました。埼玉県飯能市立図書館や愛媛県武道館では地元産の木材を多く使いましたね。

記念館新館は、スペースの少ない限られた敷地の中に「堅牢な箱」を作るイメージで設計しました。外壁は一見すると蔵のように見えますが、素材に変化を持たせました。生乾きのタイルに細かい砂を押し付け、また、青顔料(コバルト)を混ぜて新しい色が出る



世界にも類 ~重要なプロジェクトと



ように焼きました。日本で初めての試みで、太陽の動きによって微妙な色彩を味わえるはずですよ。

先日そのタイルを拝見しましたが、一見すると黒っぽく画一的な色が光線の具合で変化するのが分かりました。一つひとつの工夫が素晴らしいですね。さてスバリ、新館の特長は何でしょうか。

今回一緒に仕事している既存館設計者・高橋晶子さんも言うように、既存館は開放的でやんちゃな兄貴分ですよ。山側にある入口よりも、本来は奥側である海に向かって突き出している。つまり、海に向かってアプローチとなっていてい

ます。それと逆に弟分の新館は、山側にある入口、つまり人のアプローチに向かって突き出しています。来館者に向かっているのです。また、「堅牢な箱」と言っても決して重く固くはなく、機能的なつくりとなっています。

新旧二つの建物から、「静と動」「開

と閉」の妙味を味わってほしいですね。土地や建物が同面積同じボリュームの中に、このように対比する二つの館が在るのは世界でも余り例がないと思いますよ。

100年先を見据えた記念館に

—— 本当に楽しみですね。

先ほどからパソコンで能勢さんが手がけた国内外の建物を拝見しています。トルコのカマン・カレホユック考古学博物館なんて、建物というよりまるで地形の中に建造物が埋め込まれているような…。自然景観にまったく違和感がありませんね。設計に当たっては、土地の歴史なども調べられるのでしょうか。坂本龍馬のことも調べられましたか。

はい。初めに言ったように私は歴史や文化が好きですし、建物の設計に直接反映されなくてもその土地の歴史は必ず調べます。

私は公募に参加する前、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」を読んだばかりでした。設計者には選ばれたとき、「ご縁だなあ」と思いましたよ。

「竜馬がゆく」は、半分くら

い読んだところで、美化されているのではないかと疑問が生まれました。ですから、読後には多方面の龍馬関係や歴史の本を読みました。歴史の事実が知りたいという思いですね。第二次世界大戦などへの関心もあります。正確な事実とは何か。詰まるところ、国際情勢を含めた、現在を知る手がかりを考えるわけです。

—— そういう考え方を持つ設計者がつくる新館とは何か。また、能勢さんの持つ坂本龍馬観とはどういったものでしょうか。

ハードとしての水統性、目先の流行に流されない建物を設計しました。100年先を考えた建物です。塩害、日差しといった外部負荷はないという自信があります。耐震に対しても同じです。設計は頭の中で想像していくもので、建物ができたときの感激や感覚は、仕上げるまで



分らないものもあります。しかし、不安はありませんよ。坂本龍馬という人はスケールがでかいですね。人脈をつくる能力の高さ、人間的な魅力。幕末という時代に、普通の人には分らない新国家へのビジョンも持っている。どれをとってもすごいと思います。

龍馬さんのネームバリューを考えても、この設計は重要なプロジェクトです。本当にありがたい仕事だと思っています。

—— 能勢さんのように大きな仕事をされている方から、新館や龍馬の話を知ると、改めて建物が生まれ、変化することへのうれしさが込み上がってきます。これからもしっかりと連携しながらよろしくお願いします。ありがとうございます。

能勢修治 (のせ・しゅうじ)

株式会社建築事務所執行役員。一級建築士。日本建築家協会登録建築家。

1960年長崎生まれ、東京都在住。早稲田大学理工学部建築学科修士修了後、1985年株式会社建築事務所入社。プリンシパルアーキテクトとして実績を重ねる。

(主要作品) 県立広島女子大学付属図書館、愛媛県武道館、沖縄県立現代美術館・博物館、作新学院幼稚園、カマン・カレホユック考古学博物館(トルコ)、大正大学3号館、飯能市立図書館、伊勢フットボールピレッジ、早稲田大学中野国際コミュニケーションプラザ、など。国内外の受賞多数。



前田 由紀枝

(まえだ・ゆきえ)

現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬
記念館学芸課長

「描かれなかつた歴史」

宮川 禎一

筆者がいつも言うのは「手紙は書いてあること以上に書かれなかつたことの方が重要だ」ということだ。このことを歴史画にあてはめてみよう。

特別展覧会「没後一五〇年坂本龍馬」の展示準備のために巻や瓦版や錦絵について資料を集めていたときのことだ。池田屋騒動は有名なのに瓦版や錦絵は存在しない。それはなんとなく分るが、京都を揺るがした動乱である元治元年7月の「禁門の変」に関する明治時代の錦絵がほとんど存在しないことを不思議に思っていた。市街地の焼失範囲を示す同時代の瓦版以外は京都の絵師が同時代に描いた「甲子兵燹図」(京大)や「近世珍話」(京博)があるくらいだ。これらには政治色はなく町人迷惑が主題だ。明治時代に数多く描かれた幕末の事件(桜田門外の変)や鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争に関する錦絵の数量を考えると「禁門の変」を描いた錦絵がほとんど無いのは展覧会担当者として不思議だった。

龍馬展の期間中に佛教大学の青山忠正先生に博物館へお越いただき御専門の薩長盟約の真相について講演していただいたが、その際に「長州は禁門の変に際して御所に発砲した朝敵だった」という概念に関する木戸と西郷のやり取りが云々という青山先生のお



前川五嶺筆『近世珍話』より「禁門の変に際して京都街中を駆ける武士」京都国立博物館蔵

話を聞きながら、はたと思うところがあったのだ。それは「禁門の変」の歴史画(錦絵)を描くことは長州藩が御所に攻めかかる行為を描くことであり、「長州藩が朝敵であった過去の素性」をさらすこととなるために、維新後、明治政府がそれを描かせなかつたのではなからうか?ということだ。あるいは「長州軍不敗神話」でも作ろうとしていたのだろうか。一方、文久3年8月の政変による「七卿落ち」の絵はやたらと多い。こちらは一度朝廷を追われた三条美ら尊攘派の公卿と長州藩がやがて復権して明治新政府をつくったという敗者復活の物語の冒頭を飾る象徴的な絵だからであろう。「禁門の変」が錦絵に描かれなかつたことにはどうやら深い「歴史的な意味がある」らしい。

コラム・龍馬のこと

「龍馬暗殺犯が高知に…!？」

教員OB 宮 英司

龍馬没後150年の今年。改めて「犯人は?」という話題が沸騰している。最近では、今井信郎の自白から京都見廻り組の佐々木只三郎主犯説、そして命令を下したのは手代木直右衛門…等々が代表的な意見かな、と感じているがみなさんは如何だろうか。

ところで、その手代木直右衛門(1826~1904)が高知で暮らしていたことは意外と知られていない。会津藩士佐々木源八の長男であったが、父の兄の手代木家へ養子に入り、手代木姓となった。京都見廻り組の与頭で、龍馬・慎太郎の暗殺に直接関わったとされる佐々木只三郎は実弟。

直右衛門は23歳で会津藩の御供番となり、28歳で藩主松平容保の側近として仕え、38歳の時からは京都守護職となった藩主のもと京都府藩の公用人として京都市中の警護に当たった。そして、見廻り組のみならず新選組も配下に取っていたとされる。このように幕末の混乱期に活躍し、將軍慶喜から刀や服地、功労金を賜ったという記録が残っている。会津藩に帰藩後は、会津戦争において若年寄として籠城を指揮し、降伏後には使者として板垣退助と会談し、戦争終結に導いた。その後、責任を問われ、岐阜・名古屋・青森と移監された。明治6(1873)年の特赦後は新政府に出仕、香川県権参事を経て、同年7月20日に高知県七等出仕。翌年1月21日、岩崎権令のもとで高知県権参事(副知事役)となり、明治9(1876)年10月まで務めた。この間、権令の交代期に10日間だけ権令代理も務めた。その後、岡山県に移って郡長と区長を歴任、明治27(1894)年退官した。明治37年6月3日病没。79歳。岡山市笹山に墓がある。

龍馬暗殺を命令した人物とされる手代木直右衛門。高知で暮らした3年と3か月の間に龍馬や慎太郎に思いを馳せることもあったのではないだろうか。県庁から坂本家までは数分の距離。それにしても歴史とは不思議なものである。

“話してみるかよ”

「面が割れたか、割れないか」

小美濃 清明

「面が割れる」とはその人物が誰であるかわかることであり、氏名や身元がわかること、と辞典にはある。

最近発見された暗殺五日前、坂本龍馬が福井藩重臣、中根雪江に於てた手紙の追伸には「今日、永井玄蕃頭(げんばのかみ)方へ訪ねていったのですが、御面会は叶いませんでした。」と書いている。

永井は永井尚志(なおゆき)で、慶応3年2月3日に若年寄格になっている。幕府中枢の重臣である。

当時、永井は京都のどこに宿泊していたのだろうか。二条城には十五代將軍・徳川慶喜がおり、慶応3年10月14日、朝廷に大政奉還を上表した。

おそらく、永井は二条城に近い寺社に宿泊していたと思われる。

龍馬は11月10日、永井を訪ねたが、大政奉還後の多忙な永井に会えなかつた。宿泊している屋敷の玄関で面会を求めた龍馬は「才谷樞太郎」を名のっている。

永井の返答を待っている間に、幕府の役人たちが龍馬の近くを通らなかつたか。

龍馬は「才谷樞太郎」として、取り継ぎの幕臣と会話している。龍馬は「面はまだ割れていない」と確信していたが、永井の返答を待つ間に「面が割れたか」と思う瞬間があったかもしれない。

斬りむすぶ刀の下ぞ地獄なれ
ただ斬り込めよ 神明の剣(石舟斎)
この心境だったと思われる。

「第9回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会」
開催のお知らせ

日時 2017年5月27日(土)10:20~総会(会員のみ) 11:00~研究発表会 17:00終了
会場 高知市文化プラザ かるぼーと(小ホール) ※会場変更にご注意ください。
定員 120名(参加無料・要申込)

お申込み・お問合わせ
高知県立坂本龍馬記念館・
現代龍馬学会事務局
TEL 088-841-0001 FAX 088-841-0015
MAIL gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp